

モダンテクニクと幼児



林 健 造

一、外国語だとありがたがること

近頃、美術教育では、よくモダンテクニクということばが使われる。最近の幼稚園の絵画製作の研究も随分進んで、新しい材料や技法といえどもドン欲なまでにとり入れていこうというところもあって、その意欲には敬服するが、どうかという老婆心的な不安感もないではない。

このモダンテクニクとか、モダンメチエ(新しい技法)とかいわれるものも、ことばをそのまま生なまに使っていなくとも、方法は實際の保育に案外使われていることが多いことだろうと思う。

「つまり、紙に絵の具をたらしまして、これを二つに折り、ひらいてみるとシンメトリーのおもしろい形ができます。これをデカルコマニーといいます。」

などというとき、あああれか、あれならチョイチョイしているなどと思い出される方もあるはずである。

デカルコマニーなどとフランス語でいうから有難やというような気持もするだろうが、よく考えてみると私たちも、日常、鼻かみで経験しているところのあれである。

「次にフロッタージュといまして、まず凸凹のある金網とか、板目を探します。これに紙をあてて、クレヨンなどでこすって、その地肌をうつしとります。」

これだって、私たちは子どものとき、一銭銅貨や学校の徽章に紙をあてて、鉛筆などでうつしとって、うつった、うつったと喜んで経験をもっている。

それに東洋古来からある魚拓とか拓本とかの技法はつまりこれで、今更何もフランス語で紹介されるまでもないといいたいところである。

マーブリングでもそうである。よくきけばいわゆる墨流しである。墨流しなどは日本でも昔から色紙や染色に使われている技法で、こちらが本場みたいなものであり、何を今さらモダンテクニク

クかといいたくなる。つまり、リバイブル時代だから、何でも古いものもいかして使おうということでもあろうか。

二、モダンテクニクということ

いったい、モダンテクニクというのは何かというと、近代美術が生み出した、いろいろな新しい技法のことで、主として視覚的な効果をねらいとしているものである。

近代美術は年々新しい世界を開拓していくがそれにもなつて進歩するわけであるから、次々と新しい技法をうみだしていく。したがってモダンテクニクといわれるものも不変性のもではない。今どんなものがあるか、主なるものを次にあげてみよう。

1、オートマチックな技法

- ・フィンガーペインティング（指絵）
- ・まよいみち（手を自由に動かしてかく）
- ・筆ふり（絵の具をつけた筆をふる）
- ・絵の具流し（紙に絵の具をたらし、紙を上下左右に操作して作る）
- ・吹き流し（紙に絵の具をたらし、強く息を吹きかける）
- ・デカルコマニー（合せ絵）
- 2、地肌の変化をもとめるもの
 - ・砂や鋸くずをふりかける
 - ・練香で穴をあけた色紙を使う
 - ・コンクリートのサラサラした上に紙をのせ、石でたいて作った地肌の紙を使う

・フロクタージュ（こすりだし）

・パチック（ろう・油・クレヨンなどの排水性を利用したもの）

・コロージュ（貼り紙）

3、新しい視覚からの発見をねらいとするもの

・フォトグラム（青写真）

・フォトモンタージュ（いろいろな写真の切抜きを貼り合わせる）

・ペンジュラム（運動している光源を撮影して作る）

・虫眼鏡や顕微鏡でみる

・光や動きをとり入れる

といったものが考えられる。

三、モダンテクニクの教育的な意義

モダンテクニクは新しい技法だから、あくまで美術教育の本命ではない。いわばすもうとりは常時すもうをとっているわけではない、てっぼうといつて柱を両手でついたり、ぶつかりけいこや転ぶけいこもしている。しかしこの転ぶ練習を称してすもうとはいわないだろうことと同じである。

ところがこの転ぶことや四肢をふむ、などには、すもうと大きなかわりあいがある。つまり価値があるわけである。

モダンテクニクもそのような意味では、次のような価値が考えられよう。

- 1、抑圧の解放として、
- 2、共通性と独自性をもっている点で、
- 3、造形の基礎としての感覚訓練として、

4、新しい美の発見の場として。

技術主義から心理主義に移った新しい美術教育では、抑圧の解放ということとは相当重視されている。例えば幼児の前に白い画用紙が渡される。クレヨンも真新しい。何かちゃんとした絵をかくように母親などに強くしつけられている子どもはことさらである。あの子鳩のような眼をしょぼしょぼさせて、小さい胸をいためながら、なにをかこうかしらなどと思っている姿は、どこでも見うけられる一コマである。そんなときに先生が

「いいんだよ。今日はクレヨンさんにおさんぽさせてみましょう。紙の上の方から下の方にブラブラあるいてみましょう。紙の中心をあっちへいったりこっちへきいたり、帰りは、ゼットコースターでシューとおりてきましょうか。」

などといった自由が、ぎをさせたとしたら、どれ程救いになるだろう。そして絵をかくことにかえて興味をもつようになるかもしれない。

抑圧の質は違っていても、中学生などでも同じことで

「ああ絵か、僕はそれに弱いんだ」

などと尻ごみして、興味や関心を示さない生徒にとつて、デカルコマニーなどのモダンテクニックは救いの神であり、自然主義的な写生などない自由さと未知の世界の驚きによって、かえって異常なまでの追究心や関心をもつようになろうというものである。

次にデカルコマニーの例でもわかるように、どの子どももできる。しかもあまり巧拙の差はない。つまり共通性をもっているわけであるが、できた作品は誰ひとりとして同じものが作れない独自性

をもっている。したがって紙を開いてできた不思議なシンメトリーの形からうかぶ幻想は各人各様でおもしろい。

この共通性と独自性のかみ合いは教育の中で教材選択の場合大切な性格であろうと思う。

三ばん目には、造形の基礎練習としての場であるが、従来の美術教育がとかく題材主義に陥り、いわばダンゴだけがあってクシがなかったようなきらいがあった。例えば粘土でも、粘土を渡したら、動物を作りましょうということはやるが、徹底的に粘土で遊ばせるという場はなかったのではないだろうか。粘土をぶつけてくっつく性質を知ったり、水にとけてどろんこになったなどというクシの活動はあまりさせなかったのではないだろうか。この意味では目的をもたないモダンテクニックは、材料の可能性を経験させるという点で大きな役割をもつであろうし、そのことが造形のいろいろな領域に役立つことになろう。

四番目には、新しい眼の角度は、新しい美しさを発見し、新しい技法はまた新しい表現をうみだしていくことである。

モダンテクニックの多くは、スポンテニア（偶然的）な効果をねらっている。

ハンス・アルプという画家は、ちぎった色紙をバラバラと紙の上にならし、その形から絵画の作品を作ったし、我が国でも、宗旦豆まきの飛石（裏千家又隠席前の飛石）などは、宗旦が豆をばらりと撒いた格好からヒントをえて飛石を配置したといわれている。

このようなオートマチックな仕事は、一見、何の造形意図もないでたらめにみえる。しかしこれは従来の古い描写主義の芸術の観念

を打破し、しかもそれまでにないきわめて自由な、新鮮で、ダイナミックな活力にとんだ美しい表現をうみだしている。

フロッタージュやコラージュにしても、単なる拓本や貼り絵とは違う。近代絵画で使われる意味は、絵を作る上に、他の方法ではできない触覚的な効果や、独特の模様を生かすための新しい技法としてとり上げたものである。

写真を使ったり、あるいは虫眼鏡でみたり、レントゲンや顕微鏡でみられる世界は、人間の眼を拡大した。つまり機械と芸術の握手である。このような未知の新しい美の発見は子どもたちに近代に対処できる新しい鋭い感覚を育てていくことであろう。

以上のようなモダンテクニクは、モホリナギーたちによって使い初められてから近々三十年位にしかならない。モダンテクニクといわれることばの意味も実はこんなところにあるわけである。

四、モダンテクニクと幼児

モダンテクニクを幼稚園の絵画製作でとりあげることはいいとしても、その態度が単なる新しがりやでとり入れてはいけないことで、よくモダンテクニクの意義を考え、子どものレイディネスを考慮して有効にとり入れることである。

とくに、モダンテクニクはただそれだけの遊びにおわらずに、そこにできたものをもとにして何かを発展させていったりすることを考えることもいきた使い方である。

幼児時代は、きわめて想像力の豊かな時代である。一片の雲からも、一滴のしみにも自由なイメージをはせる。

それから何にでも新鮮な驚きの眼をむける時代でもある。雨みちにおとした画用紙を折って泣きべそをかいてもってくる。それを開いてみたら、兎さんが二四できちゃったの」と笑っているといった具合である。

もう一つの大事なことは、この時代にいろいろな材料経験をさせることで、「お前は何ものだ」という探究の芽が、将来の造形表現に大きく豊かに開花していくことであろう。

モダンテクニクと幼児のむすびつきを考えると、以上のような観点を大事にしていくことである。

五、インスタント絵画製作

幼児の絵画製作といったものは、絵や彫刻やデザインや工作といった隔然とした造形領域はなくて、むしろ綜合された独特な形をもった造形活動である。

そのほとんどが遊びの形をとり、子どもたちの生来の欲求に結びつけてこのモダンテクニクも活用するときに、それ本来の意味がいきてくるというものである。

幸か不幸か、モダンテクニクには年令に応じた発展的な体系がない。幼児もおとなも同様にできるし、興味も同じである。多少質が違っただけである。

もしも、新しい絵画製作をやってますとあって、やたらモダンテクニクばかりをしていることがあるとすれば、いかにもインスタントばやりの時代らしいが、幼児の絵画製作の意義はそこにはないはずである。